

演題名	多産系母豚における自動投薬器を用いた子豚への追加哺乳技術		
発表者 氏名	山上 怜奈	所属	畜産試験場
<p><b>1. 目的</b></p> <p>国内では多産系母豚の飼養が進んでいるが、農家は従来の方法や設備で飼養している場合が多く、離乳成績に反映されない場合がある。多産系母豚の能力を最大限に発揮するには、母豚の飼料給与を適正に行ったうえで母乳不足を補助する必要がある。そこで、哺乳子豚への哺乳用自動投薬器を用いた代用乳追加給与が、母豚の繁殖成績や子豚の発育等に及ぼす影響について検討した。</p> <p><b>2. 材料および方法</b></p> <p>母豚が授乳している状況下で代用乳を追加給与した場合（以下、「追加哺乳」）の子豚の発育への影響を調査した。試験はF1（WL）多産系母豚19頭とその子豚を用いて初産及び2産次に反復試験を実施した。調査期間は令和3年12月～令和4年8月とし、試験区の子豚には生後1日～14日目の間、3段階の代用乳（ウイニーロブリン、ミルク、スタート/日本農産工業(株)）を給与プログラムに従い、哺乳豚用自動投薬器（クミカボール/クミアイ化学）を用いて朝・昼・夕の1日3回給与した。出来る限り省力的な方法とするために、哺乳子豚用自動投薬器は代用乳を入れて分娩豚房内に設置するのみとし、子豚への馴致やシリンジ等を用いた強制経口投与は実施しなかった。対照区は慣行の飼養方法に基づき追加哺乳は行わなかった。なお、人工乳の給与については、両区ともに分娩後5日目から開始した。</p> <p>調査項目は母豚の繁殖成績（母豚体重、離乳時育成率、母豚1腹あたり増体量、発情回帰日数）、子豚の発育（子豚体重、子豚1頭あたり増体量、事故率）、追加哺乳にかかる費用とした。</p> <p><b>3. 結果および考察</b></p> <p>(1) 追加哺乳が母豚の繁殖成績等に与える影響</p> <p>離乳時育成率は試験区93.5%、対照区93.4%と全体の平均でみると代用乳の追加給与による差はなかったが、1腹あたりの哺乳開始頭数（以下、「哺乳頭数」）が少ない個体を除いてみると、哺乳頭数が多くなるにつれ対照区の離乳時育成率は低下していくのに対し、試験区は93%以上を維持していた。このことから、哺乳頭数が母豚の乳頭数よりも多くなる14頭以上の場合、追加哺乳をすることで離乳時育成率の低下を抑制する効果があると考えられた。</p> <p>(2) 追加哺乳が子豚の発育等に与える影響</p> <p>子豚の離乳時体重は試験区6.4kg、対照区5.9kgと試験区の方が約0.5kg大きく、この傾向は離乳2か月後も続いていた。また、1日平均増体量についても試験区の方が有意に多く、追加哺乳が子豚の発育に良い影響を与えることが確認できた。哺乳中の事故率については、試験区6.8%、対照区7.7%と試験区の方が約1%低下し、特に試験区では生後4日以降の衰弱死による損耗や生時体重0.7kg以上の子豚の損耗が少なかった。また、これらの結果についても哺乳頭数が少ない個体を除くと試験区と対照区の差が大きくなったため、母豚の離乳時育成率と同様に哺乳頭数が14頭以上の場合に追加哺乳の効果が高くなると考えられた。</p> <p>(3) 追加哺乳にかかる費用</p> <p>代用乳の追加給与にかかる費用は、母豚1腹あたりを14頭として試算すると、哺乳豚用自動投薬器代を含めて12,527円であった。当社における子豚の生産配布価格は基準体重20kgで14,960円であり、子豚が1頭多く生存すれば相殺できる金額であった。</p>			